

即非如一禅師と小笠原忠真

林 觀 潮

目 次

- 一、即非如一禅師の事跡
- 二、小笠原忠真との出会い
- 三、小倉藩での引き留め
- 四、広寿山福聚禅寺の建立
- 五、小笠原忠真の参禅

一、即非如一禅師の事跡

即非如一（一六一六―一六七二）は黄檗宗の名僧で、黄檗宗広寿派の開祖であつた（一）。法號は即非で、法諱（内字）は如一である。明朝末期に興る臨済宗黄檗派の禅僧として、黄檗派の開祖隠元隆琦（一五九二―一六七三）の法嗣で、日本に渡り、隠元の開いた黄檗宗の発展に尽力し、寛文五年（一六六五）四月に豊前国小倉藩で広寿山福聚禅寺（今福岡県北九州市小倉北区）を開いた。

即非は明の福建省福州府福清県の林氏の出身で、南宋の理学家の林希逸の末裔で、七歳より『孝經』などを誦した。父の林英と母の万氏は仏教をも篤く信じ、観音菩薩に祈って即非を懷妊したと言われる。十三歳の時、父を失い、母に孝行を尽くしてきた。

崇禎六年（一六三三）四月八日、母の許しを貰い、即非は福清県城内の龍山寺の西来瀨公和尚に従って剃髪し、同年の冬に福清黄檗山萬福禪寺で費隱通容（一五九三—一六六〇）に従って沙彌の十戒を受け、崇禎八年（一六三五）の二十歳で、比丘戒を受けた。崇禎十年（一六三七）に、福清黄檗山萬福禪寺で隱元に従って菩薩戒を受けた。その後、一時黄檗山を離れ、諸方に行脚した。南明隆武二年（一六四六）春、黄檗山に戻り、隱元に師事して参禪を続けた。

南明永曆四年（一六五〇）十二月三十日、黄檗山で山火事を消しているうちに穴に落ちて焼かれ、幸いに救出された際に大悟を得た。永曆五年（一六五二）正月十五日、隱元に認められ、その付法を授けられ、臨済宗の三十三伝となった。同年の夏、聖胎長養のために、福州府侯官県雪峰山崇聖禪寺に移って静住した。その人徳と文才は崇聖禪寺の化門和尚などに誉められた。

日本明曆三年（一六五七）二月、長崎崇福寺の檀越の王心渠（一五九四—一六七八）などに招かれ、また本師隱元に見えるために、即非は弟子千杲性佞（一六三六—一七〇五）らと共に長崎に渡来し、檀越らに請われて崇福寺に六年数ヵ月住して伽藍を整備し、その中興開山と尊ばれた。

寛文三年（一六六三）八月九日、即非は幕府の許しで長崎を発ち、京都黄檗山萬福禪寺に赴き、八月二十四日に京都黄檗山に入り、本師隱元を拝見し、山内の竹林精舎に住し、同年冬の結制の際に法兄の木庵性瑫（一六一一—一六八四）とともに首座を務め、十二月一日に始まる最初の黄檗三壇戒会において教授阿闍梨の

任を担った。

寛文四年（一六六四）九月四日、木庵性瑫は京都黄檗山に継席した際、即非は証明師の白槌を勤め、翌日に京都黄檗山を辞して長崎に赴いて帰国しようとした。しかし、帰国の途中で豊前国小倉藩を通った時、先日上槩の途中に会った藩主小笠原忠真に留められて、そこで広寿山福聚禪寺を創建してその開山となった。

寛文五年（一六六五）四月、即非は広寿山福聚禪寺で祝国開堂をした。寛文八年（一六六八）七月、法嗣の法雲明洞（一六三八―一七〇六）に住持の席を継がせて福聚禪寺を辞し、長崎に帰り、崇福寺に退隠した。法嗣の千杲性俊は崇福寺の住持を務めた。寛文十一年（一六七二）五月二十日、即非は崇福寺に寂した。

即非の法嗣は唐僧の千杲性俊、柏巖性節と日本僧の法雲明洞、翠峰明覚、桂巖明幢を合わせて五人いる。その門流は黄檗宗広寿派をなした。即非は法兄木庵と隠元門下の「二甘露門」と称され、京都黄檗山に「準世代」と尊ばれる。即非の語録には『即非禪師全録』などがあり、今日までに伝われる。

二、小笠原忠真との出会い

即非の生涯における一大事件は、小倉藩での広寿山福聚禪寺の創建であった。この福聚禪寺の創建は、即非の小倉藩主小笠原忠真（一五九六―一六六七）との特殊な因縁によることである。

小笠原忠真は徳川幕府の大名で、信濃国松本藩初代藩主小笠原秀政の次男として、松本藩の二代藩主（一六一五―一六一七在位）、播磨国明石藩主（一六一七―一六三三在位）を経て、豊前国小倉藩初代藩主（一六三三―一六六七在位）に移封された。母の登久姫は、松平信康の娘で、徳川家康の孫である（と）。

小笠原忠真は徳叟居士とも呼ばれ、文人的な教養を持ち、大名茶人でもあり、小倉藩の茶湯隆盛の基盤を築き、茶人の古市了和（?―一六五七）を召し抱えて小笠原家茶道古流を興した。しかも、小笠原忠真は仏教を篤く信仰し、深く禅を参じていた。晩年の五年間における、即非和尚との出会いは、彼の人生の最後を彩る喜ばしいことであつた。

寛文三年（一六六三）八月九日、即非は長崎を発ち、京都黄檗山萬福禪寺に赴いた。その事前に消息を得た小笠原忠真は、僧の法雲明洞を遣わして黒崎まで出迎えた。法雲は小倉の出身で、九歳で京都大徳寺に出家した。小笠原忠真はその才能を愛し、万治三年（一六六〇）に藩内に円通庵を建て法雲を迎えた。後の寛文五年（一六六五）一月二十五日に、法雲は小倉藩で即非の法を嗣ぎ、黄檗宗の僧となる⁽³⁾。八月十五日、即非は法雲の案内で小倉藩を通り、藩の開善寺に宿した。その日、小笠原忠真は開善寺に行き、即非に禅を参じ、問答を交わし、敬意を尽くして別れた⁽⁴⁾。この年、小笠原忠真は六十八歳で、即非は四十八歳である。この初会より二人は厚誼を結び始めた。当年の寛文三年（一六六三）十二月二日、小笠原忠真からの書信と贈物は、京都黄檗山萬福禪寺に居る即非の許に届けた。即非はそれを受けた後、感謝の返信を発した⁽⁵⁾。

三、小倉藩での引き留め

寛文四年（一六六四）九月十九日、京都黄檗山を辞して長崎に赴いて帰国しようとした即非は、小倉藩を通つた。その到来を待つていた小笠原忠真に留められて、藩の金栗園に住した。即非は最初、辞していたが、遂にその誠意に感動し滞在した。その時、即非は「駐錫吟、並序」を書き、その経緯を記した。

「駐錫の吟、並びに序⁽⁶⁾」(駐錫吟、並序)

歳甲辰九月十九日、豊州の金栗園に至り、豐主源忠真大檀越の款留卓錫を承る。予固く辞して曰く…貴治の山水は九州に甲し、ただ瑞氣を鍾ずのみならず、また以って道氣を益すべし、敢えて忤んで従かわず。但し道行の微劣を愧じ、檀德に負くこと有るのみ。今既に公の敬法の心が誠かつ切なることを感じ、遂に偈を説いて命を答え、以って夙縁の有在を志す。(歳甲辰九月十九日、至豊州金栗園、承豐主源忠真大檀越款留卓錫。予固辭曰…貴治山水甲九州、不惟鍾瑞氣、亦可以益道氣、敢不忤從。但愧道行微劣、有負檀德耳。今既感公敬法之心誠而且切、遂説偈答命、以志夙縁之有在云。)

擬辭聖壽返中原、聖壽を辞して中原に返らんと擬し、

無那延居摩詰園。おもわず摩詰園に延居す。

撥轉玄流朝海嶽、玄流を撥転し海嶽に朝わせ、

迸開慧日耀乾坤。慧日を迸開し乾坤を耀す。

微塵法裏王心裏、微塵法の裏に、王心の裏に、

舉國民崇佛道尊。挙国の民は佛道の尊を崇ぶ。

涼徳衲僧何所補、涼徳の衲僧は何の補う所か、

全提向上答深恩。向上を全提して深恩を答ふ。

これから当年の歳末までの間に、小笠原忠真は新寺創建のために、江戸の幕府に申請を出し、遂に許可を得たと思われる。新寺の場所はある徳川家康を祀る東照大権現祠堂の前に選ばれた。山号は広寿山、

寺号は福聚禪寺と名付けられた(7)。

これについては、法雲明洞の撰した「広寿即非和尚行業記」に次のように記される。

「秋の九月の初、祖を辞して崎を下り、崇福を謝して唐に回らんと擬す。重陽の後、舟は豊州の界に次ぎ、豊主は洞および開善の長老月叟を遣つて出迎え、金粟園に錫を駐す。豊主は問候し、特に殊禮を加える。先の数日に、豊大夫人那須氏は夢す、一應真が宝華座に坐し、雙日を扇上に手捧すること。醒めて之を異とし、また人に告げず。師の至りに及んで、夫人は来礼し、師が猊床に坐して円扇を手握することを見る。冥に夢と符し、喜感に勝えず、帰つて豊主に告げる。主曰く…これ有るや。客秋に我は始めて師に面し、恍として旧識の若きなり。其の靈山話頭を挙げることを聞けば、覚えずに唯唯とす。今に法師は既に降し、而して子の夢に符す。それあに偶然ならんや、実に堯天仏日の並照の兆なり。時は後れべからず。乃ち基を東山の東照大権現の祠前に択び、蘭若を鼎建し、師を延つて開宗す。臘初に吉を洵び、到つて城中に齋し、而して其の事を陳べる。因つて山を榜して広寿と曰く、寺を福聚と曰く。時に雙鹿有つて至り、人に逢つても驚かず、呦呦にして相い呼び、素より馴養する所の若きなり。豊主は合掌して曰く…師は言う、曾て佛光禪師の始めて円覚を創り、白鹿の臨筵を感じるを聞くことを。今師の広寿の榜を立つことに当つて、而してまた瑞を見、あに聖聖同揆の応ならんや。師は曰く…これ檀越の至誠の感ずる所なり。」(秋九月初、辭祖下崎、擬謝崇福回唐。重陽後、舟次豊州界、豊主遣洞及開善長老月叟出迎、駐錫于金粟園。豊主問候、特加殊禮。先數日、豊大夫人那須氏夢一應真坐寶華座、手捧雙日於扇上。醒而異之、亦不告人。及師至、夫人來禮、見師坐猊床、手握圓扇、冥與夢符、喜感不勝、歸告豊主。主曰…有是哉。客

秋我始面師、恍若舊識。聞其舉靈山話頭、不覺唯唯。今法旆既降、而符子之夢。夫豈偶然、實堯天佛日並照之兆矣。時不可後。乃擇基於東山。東照大權現之祠前、鼎建蘭若、延師開宗。臘初涓吉、到齋于城中、而陳其事、因榜山曰廣壽、寺曰福聚。時有雙鹿至、逢人不驚、呦呦相呼、若素所馴養者。豐主合掌曰…師言曾聞佛光禪師始創圓覺、感白鹿臨筵。今當師立廣壽之榜、而復見瑞、得非聖聖同揆之應耶。師曰…是檀越至誠所感。）

四、広寿山福聚寺の建立

寛文五年（一六六五）正月十五日、広寿山福聚禪寺の仏殿が立ち始めた。それに当って、即非は上樑の詩を詠じた。

「上樑（8）」

豎起撐天柱、	撐天の柱を豎に起こし、
橫安法界梁。	法界の梁を横に安く。
山川俱絢彩、	山川は俱に絢彩となり、
邦國現禎祥。	邦国は禎祥を現す。
鹿護傳燈鉢、	鹿は伝灯鉢を護り、
雲敷選佛場。	雲は選仏場を敷く。
春光開祖印、	春光は祖印を開き、

吾道永昌昌。 吾が道は永く昌昌なり。

福聚禪寺の伽藍造りに、小笠原忠真は沢山の人力を投入したようで、六十日の間に、仏殿、山門、方丈、禪堂、齋堂、浴室などを含んで、福聚禪寺の伽藍は完全に出来上がった。そして、三月十五日に、即非は請われて開山として新寺に進んだ。その時の感銘を、即非は次の一文に記した。

「錫を卓す、序有り⁽⁹⁾」(卓錫、有序)

豊生源大檀越は広寿山福聚禪寺を開創し、予を延って錫を卓す。本年の正月十五日に、始めて梁棟をさだめ、六十日を閲し、乃ち厥の功を訖える。其の山門、方丈、禪堂、応供堂、浴室の各寮舎、及び諸莊嚴は、次第に俱に備える。四方の随喜の者は、恍として天降地涌と疑う。三月十五日、豊主は書幣を致し、躬ら進寺を請う。一たび望めば、万松と千峰は翠を合し、三門と宝構は雲を聯ぎ、儼然として一大梵刹なり。深く知遇の隆を感じ、誠に法道に光有り。これを賦して以つて謝す。(豊生源大檀越開創廣壽山福聚禪寺、延予卓錫。于本年正月十五日、始奠梁棟、閱六十日、乃訖厥功。其山門方丈禪堂應供堂浴室各寮舎、及諸莊嚴、次第俱備。四方随喜者、恍疑天降地湧焉。三月十五日、豊主致書幣、躬請進寺。一望萬松與千峰合翠、三門同寶構聯雲、儼然一大梵刹。深感知遇之隆、誠有光於法道。賦此以謝。)

蓬萊海國老賢侯、 蓬萊海國の老賢侯は、

不爽當年大道謀。 当年の大道の謀に爽かず。

摩詰掌中開世界、 摩詰の掌中に世界を開き、

遮那頂上現瓊樓。
遮那の頂上に瓊樓を現す。

閑抛日月為球輓、
閑に日月を抛げて球輓と為し、

震動乾坤笑點頭。
乾坤を震動して笑つて點頭す。

勘破世間三不朽、
世間の三不朽を勘破し、

深培萬樹蔭閻浮。
深く万樹を培つて閻浮をおおう。

因みに、三月十五日の晋山儀式の前、即非は小笠原忠真から進寺の請啓を受けて、允可の返事をした。次はその時の請啓と返書である。

「豊主源大檀越は広寿山福聚禪寺を創建す。法雲上座と進寺を請う啓¹⁰⁾」

（「豊主源大檀越創建廣壽山福聚禪寺。同法雲上座請進寺啓」）

伏して以つて未だ宝林を離れざれば、人々は待つて恃怙と為す。既に豊国に臨めば、在在に倚つて津梁と作す。慈悲を捨てず、虔懇を俯応す。恭しく惟う、大知識の即翁大和尚は、人中の俊、法中の龍なるを。錫を振つて南に飛び、五三の知識を勘過し、折葦して東に渡り、四百餘州を載来す。炉鞴を崇福堂中に開き、仏を煅え祖を鍊し、拄杖を広寿山頂に卓し、地を辟き天を開く。萬指は繞囀し、三縁は出現す。誠に雪峰の応世、臨済の重来なり。仰いで冀わくは大鑒後の龜鑒を掲げれば、三代の礼樂は重光し、貞宗前の禪宗を闡べれば、少林の春葩は再発す。祖道は中興し、治化に斉同す。枝繁華盛なり、源遠流長なり。法地は一たび安けば、邦国は大いに慶ぶ。今の三月十五日を涓（えら）び、恭しく法駕を

迎え、広寿山福聚禪寺に錫を卓す。ただ冀わくは惠然に許可す。忻忤の至に勝えず。

右を大知識即翁大和尚方丈に啓上す。

法弟子源忠真頓首し九拜す。

弟子明洞和南し百拜す。

（伏以未離寶林、人人待為侍怙。既臨豐國、在在倚作津梁。不捨慈悲、俯應虔懇。恭惟大知識即翁大和尚、人中之後、法中之龍。振錫南飛、勘過五三知識、折葦東渡、載來四百餘州。開爐轉於崇福堂中、煅佛鍊祖、卓拄杖于広寿山頂、辟地開天。萬指繞圍、三緣出現。誠雪峰之應世、臨濟之重來也。仰冀揭大鑒後之龜鑒、三代禮樂重光、闡貞宗前之禪宗、少林春葩再發。祖道中興、齊同治化。枝繁華盛、源遠流長。法地一安、邦國大慶。洎今三月十五日、恭迎法駕、卓錫広寿山福聚禪寺。惟冀惠然許可、不勝忻忤之至。右啓上大知識即翁大和尚方丈。法弟子源忠真頓首九拜。弟子明洞和南百拜。）

「豊主暨び法雲上座の請啓を復す⁽¹⁾」
（復豊主暨法雲上座請啓）

福地は坦平すれば、喜んで金沙の嚴飾有り、法門は広博すれば、全く雲棟の撐持による。一会は新しく開き、付囑はなお在る。恭しく承る、豊主源忠真大檀越暨び大德法雲上座が趙王転位、興化の再來なることを。正信を未遇の前に具し、至誠を道契の後に竭す。いわゆる如鏡照鏡、以心印心なり。但し山竺は世出の材に非ず、法檀の鼎豎の力を具すことを頼る。宝所は万指を包容し、香幢は千層に高接す。盛んに希逢を挙げれば、因縁は在有り。伏して願わくは仏祖の慧命を紹続し、永く金湯を固む。共に大事因縁を了え、用つて至化を補う。大海は瀾を回れば龍は法を護り、万松は漢に挿せば鶴は家に宜しく

なり。欣んで台命に従つて道を行い、以つて答えて謹んで復す。（福地坦平、喜有金沙嚴飾、法門廣博、全憑雲棟撐持。一會新開、付囑猶在。恭承豐主源忠真大檀越暨大德法雲上座、趙王轉位、興化再來。具正信於未遇之前、竭至誠於道契之後。所謂如鏡照鏡、以心印心者也。但山埜非世出之材、賴法檀具鼎鑒之力。寶所包容萬指、香幢高接千層。盛舉希逢、因緣有在。伏願紹續佛祖慧命、永固金湯。共了大事因緣、用補至化。大海回瀾龍護法、萬松插漢鶴宜家。欣從台命行道、以答謹復。）

また、即非の晋山の後、小笠原忠真は小方丈を建て、即非の住所とした⁽¹²⁾。

寛文五年（一六六五）四月八日、即非は福聚禪寺で祝国開堂をした。その前、また小笠原忠真から開堂の請啓を受けて、允可の返事をした。次はその時の請啓と返書である。

「開堂の請啓⁽¹³⁾」（「開堂請啓」）

伏して以つてす、広寿山が宝王刹を現し、福聚海が正法輪を転ずることを。卷舒し手に在り、縦奪し時に臨む。其れ誰と為すかな、廻ち吾が師なり。恭しく惟う、大知識の即翁大和尚が宗乗の命脈、仏祖の権衡なるを。咳唾に珠璣を吐き、筆下に千層の雪浪を翻し、機変に雷電を捲き、胸中に五百の驍驪を藏す。忠真らは夙生に慶幸し、親ら法縁に預る。迷途の指南、衆星の維北と謂うべし。欽んで願わくは蚤めに宝座に登り、獅音を豊国に震え、高く祖印を提げ、真風を桑邦に扇ぐ。万指は傾心し、十方は景仰す。謹んで啓す。（伏以廣壽山現寶王刹、福聚海轉正法輪。卷舒在手、縱奪臨時。其為誰哉、廻吾師也。恭惟大知識即翁大和尚宗乘命脈佛祖權衡。咳唾吐珠璣、筆下翻千層雪浪、機變捲雷電、胸中藏五百驍驪。忠真等夙生慶幸、

親預法縁。可謂迷途之指南、眾星之維北也。欽願蚤登寶座、震獅音于豐國、高提祖印、扇真風于桑邦。萬指傾心、十方景仰。謹啓。）

「開堂の請啓を復す」⁽¹⁴⁾（「復開堂請啓」）

恭しく惟う、大檀越の元勳世徳、仁勇温恭なるを。制令すれば言を出し、動ければ至道に合う。苟しくも夙に正因を具することに非ざれば、断じてかくの如く正信なることに能わず。昨に承る、卓錫を延つて、仏法を東流に推広することを。今また開堂を命じ、国人を至善に導かんと欲す。総に自己の福田を為さず、いわゆる大人は大見を具す。第し山野の道行荒疏を愧じ、既に大法を当興の日に荷われれば、仰いで顧命を切至の誠に答える。敢えて金湯に藉り、ふたたび鐵鼓を過し、国典を宣揚し、永く山靈に祈る。謹んで復す。（恭惟大檀越、元勳世徳、仁勇温恭、制令出言、動合至道。苟非夙具正因、斷不能如是正信者也。昨承延卓錫、推廣佛法於東流。今復命開堂、欲導國人於至善。總不為自己福田、所謂大人具大見耳。第愧山野道行荒疏、既荷大法於當興之日、仰答顧命於切至之誠。敢藉金湯、重撾鐵鼓。宣揚國典、永祈山靈。謹復。）

又

上座は機先に脱穎し、天生の俊骨なり、句外に明宗し、聖養の前胎なり。自ら夙記重来に非ざれば、鮮なく全身担荷を能す。山僧の涼徳輜毛を愧じ、当に深く壁隱すべし、何んぞ明眼の畫堂に拉出することとを期すや。済北の宗風を承闡し、江西の祖令を勉振す。挙唱は雪曲の知音が無しと雖も、頼つて雲門の針鉢相投有り。一灯は托有り、法輪は恒に転じ、邦国は昌隆す。謹んで復す。（又。上座脱穎機先、天生俊骨、明宗句外、聖養前胎、自非夙記重来、鮮能全身擔荷。愧山僧涼徳輜毛、當深壁隱、何期明眼拉出畫堂。承

闍濟北之宗風、勉振江西之祖令。舉唱雖無雪曲知音、賴有雲門針鉢相授。一燈有托、法輪恒轉、邦國昌隆。謹復。）

この寛文五年（一六六五）四月八日に行われる祝国開堂は、仏教の内外に福聚禪寺の存在を正式に告げたのである。これより、福聚禪寺は黄檗宗の寺院として、また小倉藩主小笠原家の菩提寺としてその支持を受け発展していった。当日の即非の開堂法語に現れる拈香祝福の対象は、当今皇帝、本朝大將軍、文武官僚、大檀越小笠原忠真、黄檗宗の開祖隱元和尚の順番であった。これによっても、福聚禪寺の性格が窺われる。

「孟夏八日、請を受けて祝国開堂す。師は源太守の手中に請疏を接得し、衆に示して云く…佛祖は付囑し、王臣は流通す。公驗は分明なり、仰いで披露を煩う。維那は疏を宣し畢る。師は法座を指して云く…超仏越祖は総に階梯に落る。看よ、広寿は空より放下し、平地より陞高し、諸仁者の為に向上一著を撥転す。遂に陞座し、拈香して云く…此瓣香は、根が空劫に盤え、葉が閻浮を覆う。金炉に熱向し、端に伸べて供養す、靈山会上の禪祖釈迦牟尼仏、及び西天東土の歴代祖師が開堂を証明し、龍天の八部が道場を擁護することを。伏して願わくは日が鷲嶺の風を新し、時が唐虞の治を邁える。また拈香して云く…此瓣香は、天地を統し以つて根と為し、万物を会し一体と為し、端に為に当今皇帝の聖躬万福聖寿無疆を祝延し、飲んで願わくは生生に仏囑を忘れず、世世に人王と常現し、三教を興隆し、太平を坐享す。此瓣香は、明が日月の如き、秀が山河に麗し、奉じて為に本朝大將軍は位同地久なり、寿與天長なり。恭しく願わくは等閑に定邦手を伸出し、大いに靈山の正法輪を転じる。此瓣香は、四海に毓秀し、五嶽に鍾靈す。奉じて為に文武の官僚、列国の勳貴は、禄筭を増培し、儒仏を並肩す。此瓣香は、鷲嶺

に伝来し、龍宮に湧出す。奉じて為に豊主源大檀越は、出世の心を以つて治世し、有為に従つて無為を証し、法幢を建ち宗旨を立つ。炉中に熱向し、用つて檀德を酬い、恭しく願わくは福祿は巨海に深し、寿算は須弥に等しくなり。此瓣香は、賤に遇えれば則ち分文不值なり、貴に遇えれば則ち価重娑婆なり。第二回に拈出し、奉じて為に現に京畿黄檗山萬福禪寺に住す、開山の第一代、伝臨濟正宗第三十二世、七十五臘の上隠下元本師老和尚に、用つて法乳を酬いる。恭しく願わくは世間に常住し道樹と為し、千枝並秀し人天を蔭う。此瓣香は、深さが滄海を踰え、重さが丘山を越える。奉じて為に父母の養育の恩、師長の剃度の徳、十方檀那一切師友、或いは一言半句で我が慧命を資し、粒米寸絲で我が道業を成すものに、今日に普同に報謝す。伏して願わくは現在に金剛正因を植え、将来に菩提眷属と為す。遂に衣を斂めて就座す。⁽¹⁵⁾」(孟夏八日、受請祝國開堂。師于源太守手中接得請疏、示眾云…佛祖付囑、王臣流通。公驗分明、仰煩披露。維那宣疏畢。師指法座云…超佛越祖、總落階梯。看廣壽從空放下、平地陞高、為諸仁者撥轉向上一著。遂陞座、拈香云…此瓣香、根盤空劫、葉覆閻浮、熱向金爐、端伸供養靈山會上禪祖釋迦牟尼佛以及西天東土歷代祖師證明開堂、龍天八部擁護道場。伏願日新鶯嶺之風、時邁唐虞之治。又拈香云…此瓣香、統天地以為根、會萬物為一體、端為祝延當今皇帝聖躬萬福聖壽無疆、欽願生生不忘佛囑、世世常現人王、興隆三教、坐享太平。此瓣香、明如日月、秀麗山河、奉為本朝大將軍、位同地久、壽與天長。恭願等間伸出定邦手、大轉靈山正法輪。此瓣香、四海毓秀、五嶽鍾靈。奉為文武官僚、列國勳貴、增培祿筭、儒佛並肩。此瓣香、鸞嶺傳來、龍宮湧出。奉為豊主源大檀越、以出世之心治世、從有為而證無為、建法幢立宗旨。熱向爐中、用酬檀德、恭願福祿深巨海、壽算等須彌。此瓣香、遇賤則分文不值、遇貴則價重娑婆。第二回拈出、奉為現住京畿黃檗山萬福禪寺、開山第一代、傳臨濟正宗第三十二世、七十五臘上隠下元本師老和尚、用酬法乳。恭願常住世間為道樹、千枝並秀蔭人天。此瓣香、深踰滄海、重越丘山、

奉為父母養育之恩、師長剃度之德、十方檀那一切師友、或一言半句、資我慧命、粒米寸絲、成我道業、今日普同報謝。
伏願現在植金剛正因、將來為菩提眷屬。遂斂衣就座。）

五、小笠原忠真の参禪

晩年の小笠原忠真は参禪に励んでいた。即非禪師を引き留めて福聚禪寺を開いたことは、彼の生涯にとつて一大快事と思われる。寛文七年（一六六七）十月十八日の示寂まで、小笠原忠真はよく即非和尚に教えを請い、禪を追究していた。「三年に六たび府中の斎に応じ、道愛を相い忘れて雪は梅に映る。興すれば必ず庭に登つて君は榻を下り、果を嘗めれば親ら捧げて茗を同杯す⁽¹⁶⁾」と即非が感銘して詠じるように、小笠原忠真の即非に対する尊敬と親切が想像される。

即非が滞在した寛文四年（一六六四）の秋、小倉藩では農作物が大収獲であつた。小笠原忠真は適時に万石の粟を農民たちに賞与として分け、また地租を減らした。農民たちは感激して小笠原忠真と唐僧の即非を並んで二菩薩と呼んでいたようである。恐縮に思う即非は、十二月十五日に、小笠原忠真の徳行を纏めて「紀檀度、並序」の一詩を書いた。

「檀度を紀し、並びに序す⁽¹⁷⁾」（「紀檀度、並序」）

豊生源檀越は清和帝の後裔と系す。積代に食禄し、向に仏法の金湯と為す。頗るに呂文公と類し、毎晨に拈香し必ず祝つて曰く…三宝を不信するものは、我が家に生む勿れ。後に子孫はみな貴顕なり。豊

主は金枝玉葉、源遠流長なり、不言の令を行い、無為の化を成す。路に拾遺せず、市に丐者無し、牢に罪人無し。常に放生し、採捕を禁じ、羽族は蔽江連野なり。悠悠洋洋たり、宛爾として唐虞の上世なり。

今秋に予を延つて州畿に卓錫す。秋成の倍登に値い、豊主は稼穡の艱難を垂念し、乃ち有餘の庫藏を捨し、無尽の福田と成す。粟の万石を發し、農民を賞勞す。また新しく條例を給え、租賦を賜免し、十に其の三を蠲す。給公の再世に非ざれば、曷んぞ能く己になるや。農民は懷風詠德し、祝頌して帰りを知り、城を望んで頂礼し、二菩薩の出世の言有り。予は聞いて愧じを益し、曰く…農民は知恩と謂うべし。予に何んぞ有るや。これは乃ち豊主が王者の身を現し、布施を以つて説法と為す。予の証明を得るのみ。これに因つて一偈を賛歎す。時は甲辰臘月の望に在り、是日に瑞雪は祥を呈し、異葩は彩を吐く。並びに之を識す。（豊主源檀越、系清和帝之後裔也。積代食祿、向為佛法金湯。頗類呂文公、每晨拈香必祝曰…不信三寶者、勿生我家。後子孫皆貴顯。豊主金枝玉葉、源遠流長、行不言之令、成無為之化。路不拾遺、市無丐者、牢無罪人。常放生、禁採捕、羽族蔽江連野、悠悠洋洋、宛爾唐虞上世。今秋延予卓錫州畿、值秋成倍登、豊主垂念稼穡艱難、乃捨有餘之庫藏、成無盡之福田。發粟萬石、賞勞農民。又新給條例、賜免租賦、十蠲其三。非給公再世、曷能已爾。農民懷風詠德、祝頌知歸、望城頂禮、有二菩薩出世之言。予聞益愧、曰…農民可謂知恩矣。于予何有哉。斯乃豊主現王者身、以布施為説法。得予證明而已。因是讚歎一偈。時在甲辰臘月之望、是日瑞雪呈祥、異葩吐彩、並識之。）

積德遺賢裔、德を積んで賢裔に遺し、

治邦守不貪。治邦し守つて不貪らず。

年壽千及億、年壽は千及び億なり

賦免は什の三なり。賦免は什の三なり。

古國疑同趙、古國は趙と疑い、

前身或姓藍。前身は或いは藍と姓す。

佛臺呼欲震、仏臺と呼ばれて震えんと欲し、

天為雨優曇。天は為に優曇を雨る。

この「紀檀度、並序」に記されるように、「三宝を不信するものは、我が家に生む勿れ」と毎日祈願していた小笠原忠真は、敬虔な仏教信者であった。

寛文五年（一六六五）正月二日、小笠原忠真はまた即非に見え、参禪を尋ねた。その時の様子は即非が書いた次の詩に窺われる。

「豐主二日見謁、酬以道偈⁽¹⁸⁾」（豐主は二日に見謁す。道偈を以つて酬いる）

何事寒山子、何事に寒山子は、

而今笑未休。而今に笑つて未だ休まず。

郢工猶費斧、郢工はなお斧を費し、

庖解未忘牛。庖解は未だ牛を忘れず。

道向塵中悟、道を塵中に向つて悟り、

禪非事外求。禪を事外に求むことに非ず。

西江能一吸、西江を能く一たび吸えば、

千載兩風流。千載に兩風流なり。

寛文七年（一六六七）七月十五日、福聚禪寺での夏安居が円満に終わった頃、小笠原忠真は寺内の萬松軒で茶席を用意して即非を労わった。その時、即非はまた「末上の穎脱の一著を以って示し」（示以末上穎脱一著、解脫への一筋を提示していた¹⁹）。

寛文七年（一六六七）十月十八日、小笠原忠真は小倉藩で亡くなった。参禅における彼の心得は、その臨終の際、心を乱すことなく、禪定にひたすら依って正念を保つことに見えていた。彼の寂後、即非は悼んで次の詩と序を書き、彼の臨終の様子を述べ、その禪の境地を認めた。

「檀越德叟源老居士を挽す、序有り²⁰」（「挽檀越德叟源老居士、有序」）

小笠原の祖先は明德正信なり、為に朝野の称する所なり。宏址深源なれば、その後を誕啓す。居士は祖武を壯齡の時に振繩し、所踐所言が允に可法と為す。それ舍衛城に、苟処せずと謂うべし。年は從心を踰えれば、寓世に意無し。歳丁未七月末、遽かに微疾を示し、一榻を掃空し、羶然にして危坐し、常時と異ならず。それ異なる所は、飲食を差減するのみ。（小笠原祖先明德正信、為朝野所稱。宏址深源、誕啓厥後。居士振繩祖武於壯齡之時、所踐所言、允為可法。其于舍衛城、可謂不苟處矣。年踰從心、無意寓世。歳丁未七月末、遽示微疾、掃空一榻、羶然危坐、不異常時。其所異者、差減飲食耳。）

月中になお辱じる、惓惓にして存問し、五六たびにならずことを。中に高誼を感じ、曷んぞ能く口を

以つてす。十月の朔に至つて、使を遣わして致問し、曰く…弟子忠真は病に処し、七十餘日なり。四大は相い迫ると雖も、而して自ら身心泰然を覚え、了に一毫の苦惱相無し。向に吾が師の指示を蒙ることに匪ざれば、いづくんぞ能く此に臻らんや。想うに大限變故の時は、また当にかくの如きなるべし。未だ知らん、別に向上の工夫有ることを。山僧は答えて曰く…居士の云う所は、平日の学仏の驗を徴することに足る。ただこの泰然の心は、互古互今なり、了に變易無し、了に限量無し、何んぞ向上向下の云うべくこと有らん。この見に就けば、またすべからく放下し、また放下すべし、可なるや。居士は之を聞けば、一座の須弥山を釈すことの如きなり。いづくんぞ有力の丈夫に非らんや。（月中尚辱倦倦存問不五六。中感高誼、曷能以口。至十月朔、遣使致問曰…弟子忠真處病七十餘日、雖四大相迫、而自覺身心泰然、了無一毫苦惱相。匪向蒙吾師指示、焉能臻此。想大限變故之時、亦當如是。未知別有向上工夫也無。山僧答曰…居士所云足徵平日學佛之驗也。只此泰然之心、互古互今、了無變易、了無限量、何有向上向下之可云。就此之見、亦須放下又放下可也。居士聞之、如釋一座須彌山、寧非有力丈夫哉。）

嘗て左右に語つて曰く…久に広寿和尚を謁せず、大饅頭を備えて供と為すべし。山僧は飽きるに無涯に徳とし、そもそも福田の種有ることを知る。十八の早、病は当に革まれば、櫛沐し更衣し、正念を現前し、生死の路頭に、当下に看破す。恒に手を以つて自ら其の心を指し、云く…ただ広寿和尚は我を知る。また云く…当に法に如つて供養し、国家の為に植福す、云云。遂に安然に坐逝す。ああ！この臨末梢頭に當つて、十に有る五雙は心忙意乱なり。居士は能くかくの如く自在なり、所守を変えず、なお勤勤にして国家法門を以つて念と為す。靈山の記荊中より来ることに非ざれば、断じて能わすなり。（嘗語左右曰…久不謁広寿和尚、可備大饅頭為供。山僧飽徳無涯、抑知福田有種耳。十八早、病將革、櫛沐更衣、正念

現前、生死路頭、當下看破。恒以手自指其心、云…惟廣壽和尚知我。復云…當如法供養、為國家植福、云云。遂安然坐逝。噫！當茲臨末梢頭、十有五雙心忙意亂、居士能如是自在、不變所守、猶勤勤以國家法門為念、非靈山記蒞中來、斷不能爾也。）

ああ。哲人は往き、挽留に計無し。期頤に至れば、上に以つて斯道を扶け、下に以つて斯民を福す。憾と為すべし。所幸に諸賢孝は能く先志を継述し、庶くはこの心を慰める。雲上座及び專使は遺言を以つて山僧に拳似す。悲悼に勝えず、檀度を愧じて報いること莫し、德音の無聞を懼れ、故に敢えて黙らず、聊に梗概を述べ、以つて其の正信を聞し、並びに聲偈の三首を綴り、以つて奉じて挽す。（嗟嗟。哲人往矣、無計挽留、至於期頤、上以扶斯道、下以福斯民、為可憾耳。所幸諸賢孝能繼述先志、庶慰此心。雲上座及專使以遺言舉似山僧、不勝悲悼、愧檀度而莫報、懼德音之無聞、故不敢默、聊述梗概、以聞其正信、並綴聲偈三首、以奉挽云。）

那知夙障病交纏、
看破身心愈泰然。
足驗平時心系道、
臨終不變蛻如蟬。
空拳捏住三千界、
彈指聲消七二年。
蓋代勳勞奚所羨、
芳名早已播青蓮。

那んぞ夙障病の交纏を知らん、
身心を看破しいよいよ泰然なり。
平時に心が道に系ることを驗するに足り、
臨終不變して蛻し、蟬の如くなり。
空拳は三千界を捏住し、
彈指に聲は消し、七二年なり。
蓋代の勳勞は奚ぞ羨う所ならんや、
芳名は早已に青蓮を播く。

百年身世類浮漚、

百年の身世は浮漚に類、

感激高情水乳投。

高情の水乳の投を感激す。

摩頂未伸金色臂、

頂を摩し未だ金色臂を伸ばさず、

謝君拈出鐵饅頭。

君の鐵饅頭を拈出することを謝す。

推窮劫數天何樂、

劫数を推窮すれば天は何んぞ樂しまん、

說到輪回地也愁。

輪回を說到すれば地はまた愁う。

一念圓明登正覺、

一念は円明すれば正覺に登り、

八功德水七重樓。

八功德水と七重樓なり。

三年六應府中齋、

三年に六たび府中の齋に應じ、

道愛相忘雪映梅。

道愛を相い忘れて雪は梅に映る。

興必登庭君下榻、

興すれば必ず庭に登つて君は榻を下り、

果嘗親捧茗同杯。

果を嘗めれば親ら捧げて茗を同杯す。

恩如滄海難為答、

恩は滄海の如き、答と為す難し。

軸展虛空一寫哀。

軸を虚空に展いて一たび哀を写す。

哀失法屏摧國棟、

法屏を失い国棟を摧すことを哀み、

願欽佛敕待重來。

願くは仏敕を欽し、重来を待つ。

小笠原忠真の寂後、その跡を継いだ三男の小笠原忠雄（二六四七—一七二五）は、父の遺志を受け継ぎ、即非を厚く遇した⁽²¹⁾。寛文十一年（二六七）五月、即非が長崎崇福寺に寂した後、その遺骸を存する墓所は福聚禪寺に営まれた。この墓所は、以前に営まれた小笠原忠真の墓所と同じように、小笠原の代々によって大事に守られてきた。今日にも全うされる⁽²²⁾。

以上見てきたように、即非禪師と小笠原忠真との出会いは、仏教信仰を基盤にして、海を越えた大陸の禪僧と日本の信者との、身分の差を越えた一大名と禪僧との因縁であった。今日の目で見れば、この二人の間に結ばれた厚誼は、「日中両国人民の間に保っている、切っても切れない文化的淵源と歴史的連係を⁽²³⁾」示す一好例ではないかと思われる。

註

- (1) ①『新纂校訂即非全集』、全四巻、一五〇二頁、平久保章編纂、京都思文閣、一九九三年十二月。江戸時代各木刻本語録の影印版。②『廣壽即非和尚行業記』、『新纂校訂即非全集』一二九頁。③『廣壽即非和尚行實』、『新纂校訂即非全集』一二二七頁。
- (2) ①『小笠原忠真』、『黄檗文化人名辞典』五十頁、大槻乾郎、加藤正俊、林雪光編著、京都思文閣、一九八八年十二月。② <https://ja.wikipedia.org/wiki/小笠原忠真>、二〇一五年十一月二十一日。
- (3) 『法雲明洞』、『黄檗文化人名辞典』三三〇頁。
- (4) ①「機縁」…「中秋寓開善寺、豐主源拾遺來參。師問云…靈山話頭還記得麼。主微笑。師云…一念圓明無古今。主云…秋夜長江雲自淨、滿天明月印波心。師云…且喜居士不忘付囑。主禮而退。」『新纂校訂即非全集』三四八頁。②『廣壽即非和尚行業記』…「癸卯秋八月、始得赴洛。路經豐州、館於開善寺、豐主源公出接。師曰…靈山話頭還

記得麼。公微笑。師曰…一念圓明無古今。公曰…秋夜長江雲自淨、滿天明月印波心。師曰…且喜不忘付囑。公禮拜、設伊蒲供、盡敬而別。』『新纂校訂即非全集』一三一頁。

(5) 『與豐主源忠真老居士…自開善道晤、隨即言別、不覺秋復冬矣。每想高誼厚款、何日而忘。仲冬二日、遠辱書物、愈添愧赧。居士治定元勳、奕葉貴重、為國為民、大展經濟。民樂其業、物遂其生、共登仁壽之域、坐享無為之化。此即不離世而超世也。溪山有異、雲月是同。肅此復謝、並候。』『新纂校訂即非全集』八二一頁。

(6) 『新纂校訂即非全集』一〇八九頁。

(7) 『新纂校訂即非全集』一三二頁、「廣壽即非和尚行業記」。

(8) 『新纂校訂即非全集』一一二頁。

(9) 『新纂校訂即非全集』一一二頁。

(10) 『新纂校訂即非全集』八三頁。

(11) 『新纂校訂即非全集』八四八頁。

(12) 「小方丈、有引」…「予三月十五日進山、偶指方丈後、曰…此叢綠中宜夏、亦可安禪。豐主聞之、輒為建小方丈。前舒曲徑、磊石為山、下引瀑泉、以滋道韻。居民踴躍、不呼自至。不旬日工竣、人巧神速、妙奪天工、凝碧堆青、宛然圖畫。觀者勿作境會可也。因成三偈以志…幻出一樓臺、渾然天鑿開。豐君大手眼、拈出小蓬萊。體物須宗本、尋流貴得源。潑開新氣象、拓出古乾坤。石邊雲繪影、花外水生香。觸目皆禪意、步步大道場。』『新纂校訂即非全集』一一三頁。

(13) 『新纂校訂即非全集』八五頁。

(14) 『新纂校訂即非全集』八四九頁。

(15) 『新纂校訂即非全集』八六頁。

(16) 「挽檀越德叟源老居士、有序」…「三年六應府中齋、道愛相忘雪映梅。與必登庭君下榻、果嘗親捧茗同杯。』『新纂校訂即非全集』一一五三頁。

(17) 『新纂校訂即非全集』一〇九九頁。

(18) 『新纂校訂即非全集』一一〇二頁。

(19) 「廣壽即非和尚行業記」…「師早有厭繁之意、方丁未休夏、豐主就萬松軒請茶、師示以末上穎脫一著、而說及退閑、眾皆莫測其然。為豐主強留而止。入冬、豐主病矣。既大漸、安然曰…惟廣壽和尚知我。乃顧命嗣主以力護法門、為我報師之德。及豐主薨、師為盡死生之義。留一年。嗣主亦善繼述先志。」『新纂校訂即非全集』一一四八頁。

(20) 『新纂校訂即非全集』一一五三頁。

(21) 「答新豐主、有引」…「豐主十月十二日入城嗣位、是日行香、直上廣壽拜山僧像。國人見其殷勤盡禮、靡不欽其出忠入孝之篤、重法尊師之誠。因附驥瞻禮者眾。山僧聞之不勝惶恐。豐君頂禮山僧像、著地腦門光萬丈。海下因稱百谷王、宜乎一國歸仁讓。天龍恭敬不為喜、歸信侯王奚足齒。自愧山僧道力微、願如古德福台履。」『新纂校訂即非全集』一一六九頁。

(22) 二〇一五年七月二十八日、福岡県北九州市小倉北区広寿山福聚禪寺にての考察より。

(23) 習近平「日中友好交流大会にての講話」…「わたくしは、福建省に仕事をした時期に、既に十七世紀の中国の名僧である隠元大師が日本に渡したことを知りました。隠元大師は仏学経義を伝播し、また先進的な文化と科学技術を日本に齎し、江戸時期の社会発展に大きな影響を与えました。二〇〇九年、わたくしは北九州を訪ねました。その時、日中両国人民の間に保っている、切っても切れない文化的淵源と歴史的連係を、身を持って一層に感じました。」（「在中日友好交流大會上の講話」…我在福建省工作时、就知道十七世紀中國名僧隱元大師東渡日本故事。在日本期間、隱元大師不僅傳播了佛學經義、還帶去了先進文化和科學技術、對日本江戸時期經濟社會發展產生了重要影響。二〇〇九年、我訪問日本時、到訪了北九州等地、直接體會到了兩國人民割捨不斷的文化淵源和歷史聯繫。）『人民日報』客戶端、二〇一五年五月二十三日。